

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02631

研究課題名(和文)グローバル化に向けた日本語の語彙テスト開発

研究課題名(英文)Development of Japanese vocabulary tests for globalization

研究代表者

佐藤 尚子(SATO, Naoko)

千葉大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：40251152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語使用者の言語背景が多様化しつつある状況に鑑み、日本語母語話者および第二言語としての日本語学習者の日本語語彙知識を同時に測定できるテストの開発を行った。具体的には、一般語彙サイズテストと漢字変換力テスト、学術共通語彙テストの3種類のテストを開発し、日本語母語話者および国内外の日本語学習者を対象に実施した。

実施結果から日本人大学生の語彙量は約4万語であり、一般語彙に比べ学術共通語彙知識が乏しいこと、漢字圏が非漢字圏かによって語種別の知識に差があること、日本語運用能力の違いによって語彙習得の速度が異なることなどが明らかになった。また、妥当性の検証及び題のある項目の修正も行った。

研究成果の概要(英文)：In this research, we developed language tests that measure the vocabulary knowledge of native Japanese speakers and learners of Japanese as a second language, in order to be able to cope with the current situation where Japanese speakers have a variety of language backgrounds. To be specific, we developed the following 3 types of tests: Vocabulary Size Test for Reading Japanese, Kanji Conversion Test, and Japanese Common Academic Word Test. We administered these tests to Japanese native speakers and learners of Japanese.

The results indicate that Japanese university students have knowledge of roughly 40,000 words; despite this extensive knowledge of general vocabulary, they have limited knowledge of common academic words; learners with kanji and non-kanji backgrounds have different knowledge for different types of words; and the rate for learning a word seems to vary according to Japanese proficiency level. We also validated the tests that we created and modified poorly working items.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語語彙量測定 日本語語彙サイズテスト 漢字変換力テスト 日本語学術共通語彙テスト 日本語学術語彙知識 日本語話者 日本人大学生 日本語学習者

1. 研究開始当初の背景

近年、日本国内のグローバル化が進み、日本語使用者は日本語母語話者、第二言語・外国語教育を受けてきた日本語非母語話者のほか、家庭では親の母語を使用しながら、義務教育から日本語で教育を受けてきた者など、多様な日本語使用者が存在するようになってきている。大学など高等教育機関でも、従来の日本人学生か留学生かという二つの分類では対応できない多様な言語的背景を持つ学生が在籍しており、日本人学生対象に文章表現などの日本語リテラシーの教育、留学生対象に第二言語・外国語教育として日本語教育を行うカリキュラムでは不十分な事態が生じつつある。

また、近年、日本語母語話者である日本人大学生の日本語能力の低下が問題視されている。特に、語彙力の低下は大学関係者共通の認識である。語彙力は情緒力と論理的思考力を根底で支えるものであり、語彙力の低下は大学での学びの質の低下を招く原因である。その語彙力を測定することで、日本語運用能力も推測できることから、日本人大学生の日本語能力を測定するテストとして、「日本語 IRT テスト」(NHK エデュケーション制作・監修)などが開発されてきた。しかしながら、日本人母語話者の語彙知識を量的観点から議論することは、従来、あまり行われてこなかった。これは日本語の語彙量を推定するための方法論(例:大規模コーパスに基づく頻度リスト, ターゲット語の抽出方法)が確立されていなかったことが一因であると考えられる。

一方、第二言語・外国語教育としての日本語教育の分野では、全く日本語を知らない日本語初心者からその教育が始まるため、どのレベルでどの語彙を教えるのか、どのぐらいの語彙数を教えるのかなどが検討され、教材開発や教育実践、評価の上で多くの知見を有している。

これらの点から、本研究では第二言語・外国語教育としての日本語教育で開発されてきた語彙量を測定するテストをもとに、多様な背景を持つ日本語使用者の語彙力を測定するテストの開発を行った。また、大学の学びに必要な学術語彙及び漢字能力に関わるテストの開発を行った。これらのテストによって、多様な背景を持つ日本語使用者の語彙力を一元的に測定でき、語彙力の量的な比較を可能にした。それによって、多様な背景を持つ日本語使用者を教育する場合のカリキュラム開発に貢献するものである。

2. 研究の目的

本研究では、日本語の語彙量を用いて、1つのスケールで日本語使用者の日本語能力を測定するテストの開発を目指した。既に松下(研究分担者)によって開発されていた日本語非母語話者用の語彙量テストを利用し、多様な背景を持つ日本語使用者の一般語彙

に関する語彙量テストの開発を行った。

また、大学の学びに必要な学術語彙及び漢字運用能力に関わるテストの開発を行った。これにより、日本語に関して多様な背景を持つ学習者を対象としたカリキュラムの開発に貢献できる。

本研究のテストの妥当性の検証には、主に、ラッシュ分析を使用した。厳密なラッシュ分析を主基準に妥当性の検証を経て作成された日本語語彙テストはなかったため、日本語教育の分野でのさらなる研究に大きく貢献できるものと期待される。

3. 研究の方法

本研究では、既に松下(研究分担者)によって開発されていた日本語非母語話者用の語彙量テストを利用し、多様な背景を持った日本語使用者の一般語彙に関する語彙量を測定するテストの開発を行った。そのテストを母語話者である日本人大学生および国内外の日本語学習者に実施した。

また、大学の学びに必要な学術共通語彙及び漢字能力に関わるテストの開発を行った。松下(研究分担者)は漢字力測定テストの試行版を開発済みであったので、それらを参考にテストの作成を行った。これらのテストについても、母語話者である日本人大学生および国内外の日本語学習者に実施した。

ラッシュモデルに基づいて項目分析を行い、モデルに適合しない項目を修正することにより、テストの改良を行った。

4. 研究成果

(1) 日本語語彙サイズテスト(使用頻度 50,000 語レベル)の開発と日本人大学生学部1年生への実施

平成27年度には、使用頻度 50,000 語レベルまでの語彙サイズテストを開発し、3大学の日本人大学生学部1年生に実施した。

400名の結果を分析した結果、日本人大学生の大学入学時の既知語数は 41,000 語前後と推計される。また、一部の語彙量の少ない学生を見つけ出すツールとしてこのテストを活用することが可能であることが確認された。正答率が低かった語は低頻度の語が多いほか、語頻度ランクがそれほど低くなくても、大学生1年生があまり触れる機会のないと考えられる語であった。一部の語彙については使用頻度とかわかわらず、大学1年生にとって触れる機会が多いと考えられる語、漢字から類推可能な語は正答率が高い傾向があった。

このような点から、日本人大学生が高校までにどのような語彙を習得してきたか、大学ではどのような語彙が必要か、それらの語彙をどのように教育していくか検討する必要がある。

(2) 日本語語彙サイズテスト(使用頻度 50,000 語レベル)と漢字変換力テストの国

内外の日本語学習者への実施

さらに、平成 27 年度には日本語語彙サイズテスト(使用頻度 50,000 語レベル)と漢字変換力テストを日本語母語話者である日本人大学生と日本・韓国・中国・インド・スウェーデンの日本語学習者 851 名に実施した。

その結果、学習者の語彙量、漢字変換力と学習時間の関係を見てみると、学習者が母語話者と同程度になるには 2,000 時間の学習時間が必要であることが明らかになった。また、初級では学習に時間がかかるのに対し、中級では効率的に学習できるようになり、上級に至ると、再び、時間がかかることが明らかになった。さらに、日本語学習者について日本語の語彙の語種と学習者の母語との関係を見てみると、中国人母語話者は相対的に外来語が難しく、漢語が易しい。それに対して、他の学習者はその逆であった。

(3)日本語学術共通語彙テストの開発と日本人大学生への実施

平成 28 年度は、より弁別力の高いテストの開発を目指し、学術共通語彙テスト(Ver.1)の開発を行い、3 大学の日本人大学生 510 名に実施した。

その結果、学術共通語彙は頻度が高く比較的易しいと考えられる語であっても、大学生の理解度が一般語彙に比べて低い傾向があることが明らかになった。また、学術共通語彙において、正答率と対象語の頻度順位の相関が弱いことが示され、繰り返し接するだけでは習得が難しいことが示唆された。正答率の低かった語は、日常会話ではあまり使用されない語が多く見られた。テキストジャンル別頻度と正答率の相関を見てみると、「ネットフォーラム」との相関が最も強く、次に「政治法律」「経済商業」のテキストとの相関が強かった。「ネットフォーラム」は学生が日頃接しているものであり、また、「政治法律」「経済商業」はニュースや新聞からのインプットが多いと考えられる。

(4)日本人学生と韓国人日本語学習者の日本語学術共通語彙量の比較

平成 28 年度は、国立大学(2 大学)で学ぶ日本人学生(81 名)と国立大学に入学する韓国人日本語学習者(日韓共同理工系学部留学生)(99 名)に学術共通語彙テスト(Ver.1)を実施した。

6 か月の韓国での予備教育を修了した時点で、上位層は日本人学生と同程度、学術共通語彙を理解しているが、下位層は日本人学生の最低点との差が大きく、渡日後、日本で行われる予備教育期間中に指導の必要があることが明らかになった。

(5)改良した学術共通語彙テストの実施、および、義務教育課程と高等教育課程での習得状況の比較

平成 29 年度は、改良した学術共通語彙

テスト(Ver.2)を 2 大学の日本人大学生 396 名に実施した。既に、実施していた小学生 1,874 名、中学生 1,752 名との結果と比較した。

小学 4 年生から中学 3 年生までの習得状況を見てみると、小 4 はいずれの頻度レベルの問題でも正答率は半分以下であるが、その後、すべての頻度レベルの問題で学年が上がるにつれて正答率も上がっていき、大学生では、問題の頻度レベルに関わらず、8 割程度の正答率となった。また、2 大学の結果を比較すると、大学間の得点差は 2 学年分に相当する。低頻度で難度の高い学術語彙においては、得点が低い大学の正答率は、得点の高い大学よりも中 3 に近い結果であった。義務教育段階で平均的な生徒が習得している学術共通語彙が理解できない大学生が存在することが確認された。小中学校段階からの語彙力の引き上げの必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 3 件)

田島ますみ、佐藤尚子、橋本美香、松下達彦、笹尾洋介、日本語学術共通語彙テストの開発、中央学院大学 人間・自然論叢、査読無、45、2018、pp.19-31

佐藤尚子、田島ますみ、橋本美香、松下達彦、笹尾洋介、使用頻度に基づく日本語語彙サイズテストの開発 50,000 語レベルまでの測定の試み、千葉大学 国際教育学研究、査読有、1、2017、pp.15-25
DOI:10.20776/S24326291-1-P15

田島ますみ、佐藤尚子、橋本美香、松下達彦、笹尾洋介、日本人大学生の日本語語彙量測定の試み、中央学院大学 人間・自然論叢、査読無、41、2016、pp.3-20
<http://www.cgu.ac.jp/Portals/0/12-librery/kiyou/n41-1.pdf>

[学会発表](計 5 件)

田島ますみ、佐藤尚子、松下達彦、笹尾洋介、橋本美香、日本語学術共通語彙知識の発達 義務教育課程と高等教育課程での習得状況の比較、日本リメディアル教育学会、2017.8.23、日本理科大学(大分県)

佐藤尚子、田島ますみ、松下達彦、笹尾洋介、橋本美香、使用頻度に基づく学術共通語彙テストの開発と実施 国立大学の学生と、国立大学へ入学する韓国人日本語学習者を対象として、専門日本語教育学会、2017.3.3、横浜国立大学(神奈川県)

松下達彦、佐藤尚子、笹尾洋介、田島ますみ、橋本美香、第一言語・第二言語としての日本語語彙量と漢字変換力の測定、日本

語教育国際研究大会、2016.9.10、バリ（インドネシア）

田島ますみ、佐藤尚子、橋本美香、松下達彦、笹尾洋介、日本人大学生は学術共通語彙をどの程度理解しているのか、日本リメディアル教育学会、2016.8.25、大阪国際大学（大阪府）

田島ますみ、佐藤尚子、橋本美香、松下達彦、笹尾洋介、日本人大学生を対象とした使用頻度に基づく日本語語彙サイズテストの開発 50000 語レベルまでの測定の試み、日本リメディアル教育学会、2015.8.29、北星学園大学（北海道）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

科研プロジェクト グローバル化に向けた日本語の語彙テスト開発 ホームページ
<http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/PersonalWeb-site/project/Sato-kaken/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 尚子 (SATO, Naoko)
千葉大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：4 0 2 5 1 1 5 2

(2) 研究分担者

松下 達彦 (MATSUSHITA, Tatsuhiko)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：0 0 2 5 5 2 5 9

橋本 美香 (HASHIMOTO, Mika)
川崎医科大学・医学部・准教授
研究者番号：7 0 4 6 2 0 4 1

笹尾 洋介 (SASAO, Yosuke)
京都大学・国際高等教育院・准教授
研究者番号：8 0 6 4 6 8 6 0

田島ますみ (TAJIMA, Masumi)
中央学院大学・法学部・准教授
研究者番号：9 0 5 3 4 4 8 8